

西日本豪雨、市民への緊急メッセージ

防災学術連携体が発表

防災減災・災害復興に関わる56学会のネットワークの「防災学術連携体」の幹事会は7月22日、緊急メッセージを発表した。今後、夏後半から秋にかけても大きく雨が降りやすく、二次災害が危惧され、市民一人一人が災害の危険性を知る義務があることなどから、市民に向けて発表することにした、という。メッセージを以下に記した。

1 地球環境の変化は、自然災害として身近に迫っています

- ・温暖化の進行にともない、長期的に見れば日本近海も温暖化し、大気中の水蒸気量も増えつつある中、豪雨の発生頻度が高まりその規模も大きくなる傾向にあります。
- ・実際、近年は深刻な豪雨災害が毎年起きており、日本中どこでも小さな町でも大きな都市でも、地形や河川の特徴、土地利用によって、洪水氾濫や浸水、土砂崩れや土石流などの危険性が高まっています。
- ・今夏も「平成30年7月豪雨」による甚大な被害が、西日本を中心に過去に例を見ないほど広域に広がっています。
- ・今後、夏後半から秋にかけては、台風や秋雨前線に伴う大雨への備えが必要です。
- ・西日本などの豪雨被災地では、特にここしばらくは猛暑に厳重に警戒してください。

2 西日本豪雨の降った地域では二次災害に備えて下さい

- ・西日本周辺では水を含むことで脆弱になりやすい花崗岩類が広く分布しています。豪雨が終了した後でも、しばらくの間は多量の水分が土壌中に残っているため、土砂災害が発生しなかった地域でも、通常降雨で土砂崩れが発生する危険性が極めて高い状態にあります。
- ・山地内には今回の土砂崩れによって土石流になりやすい多量の土砂が残っており、危険な状態にあります。山地内で溪流をせき止めた状態にある土砂は、雨が降ってなくても土石流になることがあります。
- ・これらの状態は人目に触れにくい箇所にあることも多く、引き続き警戒が必要です。
- ・二次災害防止のため、多くの専門家が派遣されています

が、個人では決して危険な状態にある山地内には立ち入らないで下さい。

- ・土砂災害が発生した箇所での復旧活動に従事されている住民及びボランティアの方は、少雨の場合でも活動を中止して、早めの避難行動をお願いします。

3 あなたには災害の危険性を知る義務と、自分と家族を守る責任があります

- ・日本中いたる所で豪雨災害が発生しています。あなたのまちなちも例外ではありません。
- ・これまで豪雨があまりなかった地域ほど、経験不足のため豪雨災害が大きくなります。
- ・自分たちの安全は自分たちで守ることが第一の基本です。広域の同時多発災害の場合は、救助や支援の手が届くのが遅れる場合があります。
- ・あなたのまちなちのハザードマップと地域防災計画を参考にし、河川が氾濫した場合には何m浸水してしまうのか、土砂災害が起こりやすい場所ではないかを、自ら確認してください。
- ・「警報」は危険が身近に迫っていること、「特別警報」はこれ以上ないほどの危険が差し迫っていることを伝えています。
- ・市町村からの避難情報にも注意してください。特に「避難準備・高齢者等避難開始」が発令されたら、避難に時間を要する人（ご高齢の方、障害のある方、乳幼児等）とその支援者は避難を開始してください。

4 複合災害に目を向けましょう

- ・日本列島にはさまざまな災害が多発しています。豪雨災害



発表する米田雅子防災学術連携体代表幹事



のあとの地震、大地震のあとの豪雨、台風のとくに地震が重なるなど、被害が拡大しがちな複合的な災害に備える必要があります。

- ・最悪の事態を想定しつつ、複合災害が発生したらどう行動すればよいかを日頃から考えておきましょう。

防災学術連携体運営幹事和田章・日本建築学会元会長のコメント

便利で豊かな生活を求め、かつては人の住まない土地に道路を作り鉄道を通し、家々が建つようになっています。

真備の街は昔は田んぼで、大雨の時には遊水池として機能していたそうです。

霞堤といい、普段の川の流れは下流に流れるようになっていて、川が溢れそうになると霞堤の隙間を通して水は逆流し、田んぼに水が流れるようにしてあったそうです。

何十年に一度のことですから、あきらめがつくのだと思います。

もちろん、江戸時代には、この田んぼの中に街道はなく少し山手に通っていたそうです。

下流の町のことも考えると、遊水池は重要です。

どの町も防ごうとして、高い堤防を作っていたら、予算はいくらあっても足りません。

東北の大津波の後、Build Back Better が叫ばれていますが、真備の堤防を高く丈夫にしたら、次の大雨で、下流の町に氾濫が起きます。

上流から下流まで全体を考えた策が必要だと思います。
